

第8回愛と義のまち米沢エッセイコンテスト受賞作品

金 賞

「忘れ物」 大阪府 山田幸夫さん

私は、定年退職した後は自転車で日本一周の旅をしたいと思っていた。念願叶って、大阪の自宅を出発したのは、2010年の春。東北方面を目指した。

日本列島を北上すると、桜の開花していく様子が体感できる。桜前線がゆったりと移動する風景は、日本の四季そのものだ。爽快感を満喫し、駆け抜ける日々。

ところが、である。宮城県気仙沼市に到着した時、財布がないことに気が付いた。現金だけではなく、カード類も入っていたので、茫然自失。どこで失くしたのかまったく記憶がない。未練を残しながら、旅を断念しなければならなかった。大阪へ戻ること以外の選択肢はなく、持っていた万一の時のお金で夜行列車に乗り、大阪へ戻った。

重い足取りで玄関を入ると、棚の上に小さい荷物が置いてあった。住所は宮城県女川町とあるが、送り主は知らない。開くと、あの財布と便箋一枚が入っていた。便箋には、「申し訳なかったですが、財布などの中身も見てしまいました」と綴られている。

昼に入った女川港の食堂に置き忘れたのだ。お礼の電話を入れると、受話器の女性の声に覚えがある。お礼を言う私に対して、女性は、恐縮した声で、便箋に書かれていたのと同じお詫びを再び口にした。

受話器を持つ掌が、自然と固く握り締められ、徐々に感動が溢れていくのが自分で分かった。その余韻を味わいながら、愛おしむように受話器を静かに置いた。

あの日、昼には遅い時間帯のためだろう、食堂は私一人だった。年配の女性店主の東北弁と私の大阪弁との会話が弾んだことを思い出した。

——その翌年の2011年3月11日、東日本を地震、津波が襲った。あの食堂と女性が頭に浮かび、居ても立ってもいられなかったが、連絡がつかない。数か月後、少しでも力になりたいとの思いでやっと駆けつけた。目を覆う光景が広がっている。無我夢中で駆けつけたこの時から、私の恩返しボランティアが始まった。

銀 賞

「冬を乗切る義の町米沢」 山形県 北島 直さん

私が米沢に住まいして早22年になる。私は仕事の関係で関西から米沢に転勤した。雪国での生活は初めてだった。

家族と共に引っ越したのは忘れもしない厳冬の2月20日で当日は猛吹雪だった。

妻も子供も見渡す限りの雪景色に圧倒され声も出ない状況だった。最初は米沢市郊外に4ヶ月ほど住まいしたが、子供の通学などを考え市内の東1丁目に引っ越した。

引っ越した年から厳冬期には屋根に上がり素人ながら見様見真似で雪下ろしをした。自宅の周りは土地が狭く注意をしても隣家の庭に雪が落ちることがあった。「しまった！」と思いお隣に誤りに行こうかと思った瞬間、お隣の居間の窓が開いて、ご主人の顔が見え「うちの庭に雪が入ってもいいぞ。こっちに下ろせ。」と声をかけていただいたのだ。

会社では雪下ろしのトラブルがあることを聞き及んでいたもので気をつけていたのだが、お隣のご主人のよそ者の隣人に対する寛容な対応は本当にありがたかった。この対応には弱き者を助ける「義」の精神を感じた。

米沢ではこの豪雪に抗うのではなく、淡々と黙々と雪かきや雪下ろしをする。隣人に声をかける。雪国に住んだ人にしか分からない連帯感のようなものがある。雪のない地方の人は「雪は大変だね。」の一言で済んでしまうのかもしれない。しかし雪国に住んでいる人間にとっては「大変だね。」で済まされる問題ではない。そこで生活し、仕事をし、子育てをして老後をおくる。生きていく場そのものなのだ。毎年必ず雪は降る。雪と共に暮らさねばならない厳しい現実がそこにはある。

米沢の地に連綿と受け継がれる「義」の精神は、この厳しい冬を乗り切るために更に進化し、次世代の若者たちのDNAによって未来永劫守られて行くに違いない。

「帯が繋ぐ思い」 福岡県 感王寺美智子さん

復興支援で、熊本へ移り住むことになった時、母から一本の帯を渡された。
黒地に宝船の刺繍が施された、古い帯だ。亡き祖母の嫁入り帯だという。
「おばあちゃんを、里帰りさせてやって」
祖母の故郷は熊本だ。

祖母の家族は、昭和二十年、京城で終戦を迎え、釜山から、引き揚げ船で日本へ戻った。
わずかなお金しか持って帰れない為、祖母は、この帯の中板を抜き、中に、生きる為のお金を、隠し入れたそう。

しかし、女の自分では、すぐ見つかって没収されてしまうかもしれないと思い、東京へ帰るといふ男性のリュックの底へ入れてもらった。

だが、祖母たちの引き揚げ先は、新潟の雪深い山村。

互いに厳しい生活が始まるであろうに、わざわざ東京から、遠い新潟の山奥まで、届けてくれるなど、信じ難かったはずだ。

しかし祖母は、信じていたのだ。

慣れない山村で、不安な顔一つ見せず、坦々と生活をした。着物や手持の物を、米や野菜に替え、冬を耐えた。

やがて春の土と共に、米櫃の底も見え始めた頃。

「雪が溶けるのを待ってしまい、遅くなってしまいました。ご苦労なされたでしょう、申し訳ありませんでした」

男性は、約束どおり、帯を届けに来たのだ。

「遠いところ、ありがとうございます。東京も大変ですから、そちらで役立てて頂いてもよかれと思っていました」

祖母は、渡された帯を解くと、中のお金の半分を、断る男性に持たせたそうです。

男性は、焼け野原の東京で、自分たちの生活で精一杯だとういのに、雪深い山村の祖母たちを心配し、祖母は、食べ物も尽きそうな雪の中、男性の家族を思いやっていたのです。

「この帯は、どんな困難な時も、人を信じ、思いやって生きなさいという、おばあちゃんの思いが染み込んだ帯です。この思いを持って熊本へ行ってください」

祖母から母、そして、母から私と、時代の荒波を航海し、再び、熊本へ戻ってきた帯。

私は、その思いを、繋ぎ続けよう。

「天使のひと声」 東京都 小野 史さん

混み合った電車の中で、イヤイヤ期真っ盛りの娘が、ワンワン大泣きしたことがある。あやしても、抱きしめても、なかなか泣き止まない。まったくのお手上げ状態で、焦る。あせるから、余計に癩癩が収まらない。

負のスパイラルに陥って頭を抱えていると、ふいに天使の声が降ってきた。

「どうしたの？ だいじょうぶ？」

そのとき初めて、隣に朗らかな親子が座っていることに気がついた。目のくりくりした女の子が、桃色のシールをすっと差し出してくる。つづいて、お母さんが、「よかったら、どうぞ」と親切に声をかけてきてくれた。

私は丁寧に礼を言うと、娘の手の甲にきらきらしたうさぎのシールを貼ってあげた。無事に泣き止み、ほっと胸を撫で下ろしたところで、辺りを見回してみる。張り詰めた車内の空気が、一瞬にしてふんわり和んだような気がした。

そんなことをはたと懐かしく思い出したのは、つい先日のこと。

六歳になった娘と電車に乗ったとき、そばにいた赤ちゃんが、火のついたように泣き出したのである。乗客たちはみな、見て見ぬふりをしている。私も大変だなあと思いつつ、ちらちら見やるのも悪いからと、窓の外を眺めていた

すると、静かに絵本を読んでいた娘が何を思ったのか、ぱっと立ち上がった。急いで赤ちゃんの元に近寄っていく。

「だいじょうぶ？ これあげるから、泣かないで」

そう言って、スカートのポケットから折り紙の金メダルを取り出した。赤ちゃんがメダルをぶんぶん振り回す。たちまち笑顔になった若いお母さんにつられて、私も柔らかい笑みを零した。

「いいものもらって、よかったねえ」

「お姉ちゃん、えらいねえ、」

周りの乗客から褒められて、娘も鼻高々だ。軽く世間話をしてから下車すれば、心がぽかぽか温まっていく。

思いやりの心が育っていることを嬉しく思うと同時に、私も幼い娘を見習って、まずはひと声かけていこうと、ぐっと気を引き締めた。

銅 賞

「縁は円」 広島県 見坂卓郎さん

生後五か月の息子とともに慣れない広島の地に引っ越してきた妻は、明らかに憔悴しきっていた。見知らぬ土地、見知らぬ人々。実家を離れ、昼間は幼い息子と二人きりの生活。心細さも相当なものだったと思う。

そんなある日。仕事を終えて家に帰ると、妻が上機嫌で出迎えてくれた。

「何かいいことでもあったの？」

私が訊ねると、妻は思わぬことを口にした。

「今日ね……向かいのおばあちゃん家に遊びに行ったの」

「——え？」

いきなりのことで頭がついて行かない。うちのアパートの前には、平屋建ての民家が何棟か建ち並んでいた。いわゆる地元民の集まりであり、私たちのように他所から来た者にとっては敷居が高い印象があった。

「どうして、そんなことになったの？」

私の問いに、妻は相変わらず嬉しそうな顔で答えた。

「駐車場で子供と遊んでたら、おばあちゃんが話し掛けて来たの。『可愛いね。どこから来たの？』って」

「うん」

「それで、山口からって答えたら、『私も昔、長崎の五島列島からたった一人で嫁いで来たんだよ』って教えてくれて。そこからすっかり意気投合して、家までお邪魔しちゃった」

妻が言うには、おばあちゃんはその時の心細い経験から、同じような境遇の人には絶対に優しくしようと決めていたらしい。実際に、私たちの他にもまるで我が家のようにおばあちゃんの家を訪れる家族を何人も目にした。

お土産に、畑で採れたというキャベツやきゅうりをたくさんもらった。それらは、ドレッシング無しで食べられるほど甘くて美味しかった。

今でも、三歳になる息子と、生まれたばかりの娘のことを「うちの孫っ子（まごっこ）」と呼んで本当の孫のようにとびきり可愛がってくれている。

偶然引っ越したアパートで、これほど素敵なお会いがあったのはまさに奇跡だと思う。

縁は繋がり、円をなす。

おばあちゃんがそうしてくれたように、私たちもいつか、同じような境遇の人たちに優しさを繋いで行ければと思う。

「恐縮千万の至」 福島県 高野美智子さん

天気予報によると福島が東北で一番暖かい。国道 13 号線を辿って米沢に入ると、福島の雪は斑なのに米沢の田畑は真っ白だ。だからかな？山形には大掛かりな花畑が多い。そのことは職場でのストレス解消のために、週末にドライブに出掛けるようになって知った。

バラ園、アヤメ園、ユリ園、ダリヤ園と季節を追って見頃になる。その合間につるし雛、浮世絵、写真、海月、美術館・博物館の企画展、最上川を日本海まで辿ったり、日帰り温泉に入ったりして次週の英気を養った。

定年後、国道 121 号線を使って山形に出入りするようになって、私は初めの頃、米沢辺りで迷子になった。そしてびっくりしたことがある。一度目は、米沢でこれからもっと北上していこうとしていたときだ。国道に出るにはどう行けばいいですか、と車の窓から道路沿いのベランダで洗濯物を干している奥さんに訊いた。するとその奥さんは少々間をおいてから、ちょっと込み入っていて口で説明するのが難しいから、車を出すから待っててね、と言う。私は慌てた。いえいえ、そんな、申し訳ない。どっちの方角だか、指指^{ゆび}していただければ。本当に親切な方だった。

もう一度は、逆に米沢より北にある所からの帰りだった。米沢に入る頃には暗くなっていた。スーパーがあったので駐車場に車を停めて、人を捜した。三十代らしき男の人がいた。福島に帰るのに国道 121 号線に出たいのですが。すると、ついてらっしゃい、と言って、自分の車を走らせた。私は、彼は家に帰る途中なのかな、と気楽についていった。あっ、見慣れた風景だ、と思ったら、その方も車を停めた。ここからは真っすぐだから大丈夫かな、と言う。私は、丁重にお礼を述べた。その車はUターンして走り去った。うわっ、わざわざだったの！恐縮千万の至でした。

私も、お二人に直接お返しはできないけれども、どなたかにお返しをいたしましょう。

「伏見さんの眼差し」 埼玉県 小松崎有美さん

これは私が小学生の時の話です。私はいじめがきっかけで小学校四年生から不登校になりました。学校に行こうとするとお腹が痛くなったり、涙が止まらなくなったりしたのを今でも覚えています。五年生になって担任の先生や両親と話して保健室登校からスタートすることになりました。当時皆が学校に着く頃に家を出て、誰にも会わないように向かいました。しかし学校が近づくにつれ歩幅が小さくなり、ますます引き返したくなっていくのです。そんな時いつも学校前の横断歩道にはこども見守り隊の伏見さんがいました。登校時間はとっくに過ぎているのにいつもそこにいたのです。「なんでこんな時間に歩いているの」「どうして一人なの」正直、はじめはそんな言葉を覚悟していました。しかし一度も言われることなく、むしろ「おはよう」と言って笑ってくれました。その笑顔がなんだか、ここまで歩いて来られた私を褒めてくれているようで嬉しくなりました。校門に入る時も伏見さんがこちらを見ていました。笑いながら、手をふって。その笑顔が憂鬱な私の背中をポンと押してくれました。

あれから20年。最近どうしているかなあと思っていたとき、伏見さんを新聞の記事で見つけました。わんわんパトロール中に徘徊の高齢者を保護したという記事でした。その肩書きは高齢者見守り隊となっていたのです。

こども見守り隊から高齢者見守り隊へ。

今もなお、あのやさしい笑顔でこの町を見守っていることに嬉しくなりました。それからというもの伏見さんのやさしい眼差しを浴びたこの町はいつそう温かく感じられます。

「勇気ある一言」 大阪府 渡辺廣之さん

通勤電車は、駅に停まるたびに窮屈になる。「そろそろ席を譲られる年齢だね」と話し掛ける三十代の息子に、「まだまだ」と答える私。今年で六十五歳。前期高齢者の仲間入りを果たしたが、空席は不要だ。しかし、少し離れた場所で、赤ん坊を抱いた母親が立ち、学生が前の座席でスマホをいじっている。小声で「あれは良くないな」と言うと、息子は、「横向きのスマホはゲームに夢中だから、席を譲らないと思うよ」と答える。

そんな会話を交わしてしていると、電車が徐行運転を始め、止まった。そして、「架線に異物が接触し、信号が赤に変わりました。お急ぎのところ申し訳ありませんが、しばらくお待ち願います」と、車内放送が流れた。職場や学校の始業時間に遅れるのではないかと困惑する乗客たち……。しかし、誰も声を発しない。時間だけがゆっくり流れる。

そのときだ。「いつ動くかわからないので、席を譲り合いませんか」と、横にいた息子が大きな声を発したのだ。その提案を受けて、まずは一人のサラリーマンらしき男性が立ち上がった。すると、座っていた乗客が次々に立ち上がったのだ。もちろん、「いえ、大丈夫ですから」と、着席を辞退する客もいた。息子も辞退派の一人だ。私は、「どうぞ座ってください」と優しく勧めてくれる中年女性の好意に甘えることにした。そして、少し離れたあの場所では、赤ん坊を抱いた母親が腰かけていた。

電車はまだ動かない。しかし、赤の他人の乗客たちは、互いに心を動かしたのだ。心なしか、車内がほんわかとした空気に包まれた。そして、勇気ある一言を発した息子を、私は誇らしく思った。「帰りに一杯やろうか」と座席から声を掛けると、「お父さんの奢りならね」と、息子は笑顔を返したきた。今日は良い一日になりそうだと思った。

「初めての帰省」 高知県 中内千咲さん

高校生の頃、家から学校までの距離が遠かったため親戚宅に下宿していた。家族と離れて暮らしていた私は人生初めての交通機関を使っての帰省をした。普段から公共交通機関を使う機会が少ないため、正直不安はあった。その不安は的中。バスに乗るも、一向に見たことのある景色にたどり着かない。不安が募る中、信号待ちの時に運転手さんに恐る恐る確認してみる。

「このバスってどこに向かってますか？」

返ってきた言葉は、聞いたことのない地名だった。そして私の実家とは逆方向に行っていると教えてくれた。頭が真っ白になっている私を見てか、バスの運転手さんはここから降りて私の地元に向かうバスがないかを確認してくれた。しかし、ド田舎であったために、バスが出るのは数時間に1本。私の地元に向かう最終便は出てしまっていた。私はまたもや頭が真っ白になる。その時、斜め後ろのおじいさんが

「もうすぐ降りるけど、一緒についてきい。家までおくっちゃうけん」

私は驚いて声を出せなかった。

「わしだけじゃ不安やろき、今から婆さんに電話かけてバス停まで来てもらうき大丈夫やけね」

戸惑う私に、バスの運転手さんも

「このじいさん地元人やけ安心して甘えちよき」

という。

「すみません、お願いしてもいいですか？」

おじいさんは笑顔で

「こんな年寄りでもようけりや」

と謙虚に言った。

私はおじいさんの親切に甘え、おばあさんがバス停まで車で来てくれ、実家まで送ってもらった。

「本当にありがとうございました」

何度も頭を下げる私に

「若い子と喋れて楽しかった、ありがとう」

と最後までおじいさんは謙虚とやさしさに溢れていた。

若いうちは親切を与え、年を取るごとに親切を受ける側が変わるのだと考えていたが、このおじいさんとの出会いが考えを変えた。年を取っても人を気遣い親切をできる豪快でどこか謙虚なおじいさんを尊敬している。私はおじいさんのように老若男女問わず親切をできる人になりたい。